



本協会の会報「センドードつうしん」第2号をお送りします。「センドード」とは、宮沢賢治が童話「ポラーノの広場」で「仙台」を エスペラント風にもじって「センドード」と表現したことにちなむものです。

いまだ新型コロナウイルス禍のもとにありますが、これが世界をどこへ導くのか。そんなことを思いながらお届けします。

舞台は『金閣寺』

大江 勝秋

今夜は仲秋の名月。世の中は「外に出るな、人に会うな」の大号令。やっと人心地が付いて、近くの小山に上った。秋気に包まれて夜空を眺めると、雲間から月の光が射し、やがて満月が現れた。二月のコレラ禍から実に、八ヶ月ぶりに風雅の思いに浸って嬉しかった。が、間もなく読書会で読み習している三島由紀夫『金閣寺』の終章が浮かんできた。金閣寺に火を放った寺僧は左大文字山に駆け上り炎上する様を確かめる。「私は煙草を喫んだ。一ト仕事を終えて一服している人が良くそう思うように生きようと私は思った。」

月光を浴びる金閣より燃え上がる金閣を想像

発行所 仙台・羅須地人協会

- 〒980-0811 仙台市青葉区一番町 2-5-12
一番町中央ビル 8階 「シニアネット仙台」内
- HP <http://rasuchijin.jpn.org/>
- Tel 022-266-5650 FAX 022-266-5662
- メール rasuchijin-office@rasuchijin.jpn.org



当協会は、事務所を、諸事情により2018年10月に上記に移転いたしました。

しながら坂を下りた私は、この末尾が気になって仕様が無い。北陸の貧乏寺に生まれて、幼少から金閣の美に憑依された溝口（主人公）は、最後は金閣と心中しようと準備した毒薬と小刀を谷間に投げ捨てて自決の決心を翻す。ここ迄ページを操っていた読者は「何、コレッ」と度肝を抜かれる。又、読み返す。何度読み直したろう。その謎に迫るヒントがある筈と思いながら……。

柏木(主人公溝口の学友)が溝口に語る場面、「この世界を変貌させるのは認識だと。……この生を耐えるために、人間は認識という武器を持ったのだと云おう。動物にはそんなものは要らない。動物には生を耐えるという認識なんてないからな……」(新潮文庫版 P273) これに対して吃りつつ溝口は「世界を変貌させるのは行為なんだ……」と告白するがしかし、柏木は「あとは狂気か死だよ」と応ずる。

そして、結末に至って、溝口は「……してみると私の永い周到の準備は、ひとえに、行為をしなくてもよいという最後の認識のためではなかったか。」(P323)

国宝の金閣に火を付けて、一ト仕事を終えたと感ずる心情はやはり、狂気だがその後の「生きよう」と決心する一行は読者がどう解釈しようと彼の認識であると彼れ是れ考えている中に

この異常な金閣への執着は、作家三島由紀夫のそれでないか。無上に金閣が好きだったのだろう、その焼亡は余程の衝撃だったろうと想像すると、この傑作の主人公は金閣寺ではないかと思ひ遣った。金閣を描写する筆力はあの「富嶽三十六景」ならぬ「金閣三十六景」と名付けたい程、美事だ。三島は金閣寺の題材を得て、彼の面目躍如たる多彩な才能を発揮出来た。

折しも、今年は、三島没後 50 年、金閣焼亡 70 年である。マスコミや世評上に、あの忌わしい事件とともに、三島の亡霊が表れたような気がする。「金閣」の字面も音韻も好きだと述べる三島に私も同感する。

読後、何度も読んだ所為か、故三島の新才能「金閣寺」(?)を観たような錯覚をした。

「雨ニモマケズ」考

明石 嘉夫

階下から小五の孫娘が朗読する声が聞こえてくる。耳を澄ますと宮沢賢治のことのようだ。島根県の松江から遊びに来ていた孫は宿題の国語の朗読をしていたのだ。それは西本鶏介氏の書いた「宮沢賢治」という文章で 10 頁にわたるものだった。そこには「雨ニモマケズ」の詩も載っていて、それを暗唱することも課題だという。孫はそう言って「雨ニモマケズ」の全文を暗唱してくれた。

孫が読んだ教科書を出している T 書籍は毎年のように小五又は小六の国語の教科書に「雨ニモマケズ」を掲載しているという。「雨ニモマケズ」は他の教科書会社でも掲載しているという。教科書に掲載され多くの子供達に読まれることによって宮沢賢治と彼の作品が知られていくこ

とはとても嬉しく思います。

なぜ宮沢賢治の童話や詩は教科書に掲載され続けているのか。構大樹氏によると「戦前は 1942 年大政翼賛会が編纂した『詩歌翼賛』へ『雨ニモマケズ』が採録されたり、満州開拓成年義勇隊で教材化されるなど総動員体制に利用された。戦後は国定教科書（後に検定教科書）に採用され、小中高等学校の国語教科書にも『雨ニモマケズ』が選ばれた。しかし原作の『一日玄米四合……』が『三合』に変えられていた。この戦後教科書への採用が宮沢賢治を拡散させ今日に至るまで流通を続けさせるきっかけになったと考えられる」（構大樹『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』大修館書店）という。

教科書に採用されることで有名になり、多くの国民に愛唱されることになった「雨ニモマケズ」をどのように捉えるべきか。「雨ニモマケズ」にはこれを高く評価する人と賢治の他の作品と比べ取るに足らない作品だと酷評する人や「ヒドリ/ヒデリ」などの論争がありました。またこの詩の後半に出てくる「デクノボー」については花巻で賢治と親交のあったキリスト教徒の斉藤宗次郎がモデルだという説があります。斉藤宗次郎は新聞を雨の日も風の日も吹雪の日も嬉々として配達していたという。またデクノボーは浄土真宗のいう妙好人のことだという説もあります。

「雨ニモマケズ」はいろいろな視点から読み取ることのできる詩です。作家の井上ひさし氏は「この詩は日本人のこれからの理想かもしれない。非常に謙虚に生活の欲望をあるところで抑えながら同時に人のためになろうとする。……これは弱虫のようにみえて、じつはものすごく強い思想なのです」という。

法華経の熱心な信者だった賢治は地上に浄土を実現するという理想を追求しました。その活動の場所が賢治が 30 歳ごろに設立した羅須地人協会でした。この協会の理念を高らかに掲げたものが「農民芸術概論綱要」です。序論に有名な「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という文章を掲げています。

賢治は地上にユートピアを求めました。しかし羅須地人協会は賢治の病気や官憲圧力等により賢治が 32 歳の時に活動を終わります。賢治の理想は挫折しました。その無念の思いや悔しさを書き遺したものが「雨ニモマケズ」ではないか。病床にあって賢治は「ソウイフモノニワタシハナリタイ」とただ祈るしかなかったように思います。



2020 年 8 月、お盆に私の故郷である東京浅草にお墓参りに行ってきました。ついでに、以前から気になっていた埼玉県日高市にある「柳田ファーム」という臭くない養豚場を訪ねてみました。ここには母豚 70 頭、肉豚 700 頭がいて、糞尿や汚水が 1 日に 3 トンも排出されるそうです。糞尿がいくつかの槽（原水槽や発酵槽）を経て、きれいで透明な水のようになります。これらの設備の詳細は柳田ファームのホームページをご参照ください（<https://yanagida-farm.com/top.html>）。

糞尿は一体どこに消えたのか？誰もが首をひねるはずです。当然ながら私も？？？という反応でした。にわかには信じがたいことが起きて

いる。これはシャーロック・ホームズでも解明できない。

そのとき私は一冊の本を思い出しました。それはルイ・ケルヴラン『自然の中の原子転換』（桜沢如一訳、日本 CI 協会、1963 年）という書物です。ルイ・ケルヴラン（Corentin Louis Kervran, 1901 年～1983 年）はフランスの生化学者 兼 理論物理学者で、一つの元素が別の元素に転換するという生物学的元素転換（Biological Transmutations）の理論を提唱したことで知られています。それは原子核物理学で言う「原子転換」とはやや異なるもので、例えば生体内で酵素やバクテリアなどによって、ある元素がまったく別の元素に変化していることを言います。従来の科学常識を覆すかもしれない重大な発見であるにもかかわらず、現在の科学では実験装置（加速器）の中では原子転換を確認していますが、自然界でごく普通に起こっている原子転換を説明できないため、その意義は認められませんでした。ケルヴラン博士自身、自分の研究があまりに今までの学説と違う結果を示しているので、発表を控えていたといえます。ヨーロッパにおいて新学説を発表したものは弾圧を受け、地動説を唱えたガリレオは火炙りの刑にかかっているのです。そうなることを恐れたのです。

博士の研究です。ニワトリのタマゴの殻はそのほとんどがカルシウムからできています。タマゴの殻の重さを計ればニワトリが出すカルシウムの量が分かります。ところが、カルシウムを含んでいない餌をやってもちゃんとカルシウムの殻の卵を産むのです。これではやはり、体内でカルシウムが産出されたとしか考えようがありませんでした。ついでに切干大根や高野豆

腐なども、原材料にはカルシウムが少ないのに、どこからともなくカルシウムがやってくるのです。まして、こちらは生体内ではなく生体外の反応です。

現代科学はケルヴラン博士の原子転換説から

目を背け続ける限り、目の前ではっきり起きている不思議な現象を解明することはできません。これこそ柳田ファームで今まさに起きていることです。放射性物質も「原子転換」されると良いのですが。

【編集後記】

2020年も残すところ2か月を切りました。新型コロナウイルスで始まり、その収束の見通しもつかないまま新しい年を迎えることになりそうです。この国では、前例踏襲をしないことを旗印にしながら、前政権の「無知と無恥」をよりグロテスクな格好で踏襲する新政権の絶望的なありようも、そのまま年を越しそうです。

なぜ、「絶望的」か。わたしたちは、現首相が官房長官時代（2015年）、当時の翁長沖縄県知事と初めて会った際に、どのような言葉を発したかをはっきりと記憶に刻んでいます。翁長知事が、前大戦末期以降の沖縄の惨苦の歴史を念頭に、辺野古新基地の撤回を強く求めたのに対し、「私は戦後生まれで、歴史を持ち出されても困る」と応じたのが官房長官でした。無論、こうしたスタンスは、学問の自立性を泥足で踏みじっても恬として恥じない学会の任命拒否問題とも通底しています。「歴史」の意味を知らないばかりか、「学問」に対して不躰の限りというほかありません。どこをどうみても「希望」が見えてきません。

ところで、当協会の中心的会員だった斎藤敬三さんが五月に逝去されました。公僕の身を退かれたあと、いわゆる自然農法の実践に携わりつつ、他方では日本の近代史の造詣を深められた方でした。昨年の九月には、羅須ゼミ「近代日本の150年—東北の視点から斬る」をご担当下さいました。「歴史」を知ることの意味、その根底にある先人の「学問」の集積の意義を真に見抜いておいでの方でした。心からご冥福をお祈り申し上げます。合掌。（樹）

【会員著書】

小野寺忠昭・小畑精武・平山昇／共同編集『時代へのカウンターと陽気な夢—労働運動の昨日、今日、明日—』2019年5月、社会評論社



篠原弘典・半田正樹／編著『原発のない女川へ—地域循環型の町づくり—』2019年9月、社会評論社



柏井宏之・樋口兼次・平山昇／編著『西暦二〇三〇年における協同組合—コロナ時代と社会的連帯経済への道—』2020年6月、社会評論社



大内秀明／著『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論—土着社会主義の水脈を求めて—』2020年7月、社会評論社

